

人権センター発足

人権センター長 郭 洋春

10月1日、立教大学に新たに人権センターが発足しました。元来立教大学には、1991年に発足した人権問題委員会が存在しました。人権問題委員会は、本学において発生した「差別落書事件」を契機として発足した組織ではありませんが、主に啓発活動を中心に人権問題に取り組んできました。それは一方で、多くの人達に人権の尊さを喚起することはできましたが、他方で1996年、学生部セミナーにおいて発生した差別発言事件に対しては主体的な関わりを持つことができませんでした。こうした限界をもつ人権問題委員会をより良いものとするため発展的に改編して出来上がったのが、人権センターです。

人権センターの役割は大別すると、啓発、点検、支援、問題解決の4つからなっています。啓発とは、大学の全構成員に対して人権に関する啓発プログラムの企画・運営、人権問題に関する各種研修の開催や資料収集、各学部・事務局が行なう啓発プログラムなどへの協力及び連絡・調整を行なうことを意味します。

また、点検とは、現在学内に存在している自己点検・評価委員会とも連絡を取りながら、各学部や事務局の普段の運営や業務を人権という観点から点検し、

必要に応じて提言をするということです。さらに、支援とは、本学の全構成員に対して、人権に関する相談・支援・協力を行ないます。そして、問題解決とは人権センター内に人権問題に関する支援・相談窓口を常設し、全構成員への人権に関する活動の支援や相談に対応すると共に、人権侵害問題発生時には本学における責任主体として積極的に問題解決に向けて活動します。また、その問題が学外の個人や団体にまで及んだ場合、大学を代表して問題解決のための必要な活動を行なうことを意味します。

以上が、人権センターの主な活動内容ですが、これだけを読むと人権センターは本学の人権問題を一手に引き受け、活動する大仰な組織であるかの印象を受けるかもしれません。しかし、人権問題の基本は、私たち一人一人が人権の大切さを理解しお互いの人権を尊重することにあると考えます。従って、人権センターの主たる活動は本学の構成員の人権意識が高まるよう様々な取組みを後ろから支え、支援することにあります。つまり、人権問題の主体はあくまでも本学の構成員一人一人であり、その活動が円滑に進むよう支援するところに人権センターの

役割がある、と考えています。

また、事務局は当面総長室内に設置されますが、人権センターが発足し事務局が設置されたからといって、当の間は、試行錯誤を繰り返しながら活動していくことになると思われますので、全ての立教大学関係者が人権問題に高い関心を持ち、人権センターの活動に協力して頂けることを心よりお願いします。

人権センター委員

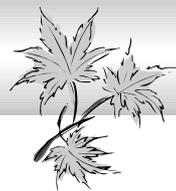
氏名	所属
センター長 郭 洋春	経済学部
運営委員 前畑 憲子	経済学部
佐々木研一	理学部
浅井 春夫	コミュニティ福祉学部
山下 恭弘	武蔵野新座キャンパス事務局
センター委員 香山 洋人	チャプレン
三浦 雅弘	文学部
石原 俊時	経済学部
高田 健夫	理学部
泉水 義大	理学部
実松 克義	社会学部
島田聡一郎	法学部
野田 研一	観光学部
石崎 等	文学部・全学共通カリキュラム運営センター
吉池 栄	総務部
阿部 通明	管財部
京角 紀子	教務部
山中 淑江	学生相談所
桂 英隆	就職部
塩野 博雄	図書館
本木 巧	武蔵野新座キャンパス事務局
相談窓口・事務局	3985-2205
金刺 信一	総長室
井上 悦子	総長室

シリーズ

こころの成長

「生きていてもいいですか」

学生相談所カウンセラー 山中 淑江



今回はいささか重いテーマです。まあ、人生とは往々にして重いものですから。これは中島みゆきの古いアルバムのタイトルです。このアルバムがでた時、私はみなさんと同じくらいの歳でした。そして、このタイトルに胸を突かれたことを覚えています。このアルバムの中の歌詞に、「生きていてもいいですかと、誰も問いたい。(略)その答えを知っているから、誰も問えない。」という言葉がありました。当時私は、その答えとは何だろう、と考えました。「いい」のだろうか「いけない」だろうか、たぶん「わからない」ではないかと思っていました。

近頃ふとこの問いを思い出しました。そして、あの答えは「私には答えられない。」とか、「自分で考えて。」とか、「勝

手にすれば。」といった言葉ではなかったかと思いました。この問いが誰かに向けられないのは、それがその相手とは関わりがないのだと突き返されることを知っているからではないか、と。そして、この問いを誰かに問うことは、人は自分の存在への肯定をひととの関係のなかに求めて生きていることを意味しているのだ、かと思いました。

このような問いを不思議に思うひともいるでしょう。「生きていてもいいに決まっているじゃない。」と。また、様々な個人的事情から、この問いを持ちつつ生きているひともいるでしょう。学生の方たちとの出会いのなかで、この問いを問えずに、深く心に抱え持っていることに気づくことがあります。また言葉にならな

いいろいろな形でこの問いを問いかけているひともいます。相談所を訪れるひとはばかりではありません。この夏休みに泊まりがけで学生の方とじっくり話し合う機会がありましたが、それぞれの心の中にひっそりと、この問いが潜んでいるように感じました。

人は孤独なものですから、自分が生きる意味はひとりで問い続けていくものなのでしょう。けれどもひとりで問うていく基盤には、ひととの関係の中で自分がここにいてもいいのだと実感できる体験が支えとなるように思います。

ひととの関わりの中では、理解し合えなかったり、裏切られたように感じたりすることは避けられないでしょう。そんな時に、この問いが心を苦しめることがあるかも知れません。自分が自分であることを支えてくれる大切な誰かとの体験は、そのひとの心の中に眠っていることもあります。もし残念なことにそのような体験を見つけれなかったとしても、私たちには、まだこれからそのようなひととの関わりを築いていける希望があるのだと思います。